

「学校ボランティア」10年の歩み

入江 直子

はじめに

中央教育審議会は、2012年8月、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」を答申し、教員養成改革の方向性を示した。そこでは、「学校現場における諸課題の高度化・複雑化により、初任段階の教員が困難を抱えており、養成段階における実践的指導力の育成強化が必要」という現状認識に基づいて、「教育委員会と大学との連携・協働による教職生活の全体を通じた一体的な改革、新たな学びを支える教員の養成と、学び続ける教員を支援する仕組みの構築（「学び続ける教員像」の確立）が必要」と改革の方向性が示された。そして、「当面の改善方策～教育委員会・学校と大学の連携・協働による高度化」として、学部レベルでは、「学校現場での体験機会の充実等によるカリキュラムの改善、いじめ等の生徒指導に係る実践力の向上」が掲げられている。

ここで示されている学部レベルでの「当面の改善方策」に関して考えると、神奈川大学教職課程は、「学校現場での体験機会の充実等によるカリキュラムの改善」、すなわち「学校ボランティア活動」の展開と「学校ボランティア演習」の授業による「実践力の向上」をめざす取り組み（JYSP＝神大・ユースサポート・プロジェクト）をすすめてきた。この「学校ボランティア」＝JYSPの取り組みは、文科省の実地視察（2011年）において高い評価を得ている。本稿は、神奈川大学（横浜キャンパス）教職課

程における「学校ボランティア」の歩みを報告するものである。

教職課程が「学校ボランティア」の取り組みを始めたのは、2004年度であった。それまで、特別活動論や道徳教育論の非常勤講師をお願いしていた元横浜市立中学校長の高橋耕文先生から、小・中学校の宿泊体験学習のボランティアを授業で紹介され、単発で関わっていた学生はいた。2003年度には、工学部4年生で横浜市の中学の数学教員を希望する学生が、学校ボランティアを紹介してほしいと申し出て、大学近隣の松本中学校の個別支援学級のボランティアに週1～2日通い続けた。彼は、教員採用試験に合格し、横浜市の中学校の教員になることができた。

このように、学校ボランティアに対する学校からの要望と学生の関心が広がりつつあった。2004年度には、すでに神奈川大学を退職されていた高橋耕文先生が、浅間台小学校に赴任された両角英之校長からの学生ボランティアに対する要望を伝えに来学された。ここから神奈川大学教職課程の学校ボランティアの取り組みが始まったのである。

本稿では、2004－2013年の10年間の学校ボランティアの歩みを報告するが、その歩みは大きく二つに分けられる。前半の2004－2009年度は、学校からの要望と学生の関心の広がりによって、活動先の学校と活動する学生の数が増加した時期で、1校3人から始まって、12校50人にまで増えた、量的拡大の時期であった。

後半の2010－2013年度は、神奈川大学が横浜市子ども青少年局から「困難を抱える青少年の進路選択支援事業」の委託を受け、「神大・ユースサポート・プロジェクト」(JYSP)という学内組織を立ち上げて、学校での「困難を抱える」小・中学生に対する学習支援＝学校ボランティアを中心に、活動を多様に展開するようになった時期である。量的拡大とともに、活動の多様化・深化の時期である。この時期の大きな特徴は、事業を受託したことで職員と学生アルバイトを雇用することができ、そのサポートによって学生のボランティア活動が定着するとともに、「学生の学び」が広がり、深まったことである。

神奈川大学教職課程が「学校ボランティア」に取り組んできたのは、「学校現場での体験機会の充実等による実践力の向上」につながる「学生の学び」に価値を置くからであり、この報告は、その視点から「学校ボランティアの10年」をふり返るものである。

1. 「学校ボランティアの始まり」から量的拡大へ (2004－2009年度)⁽¹⁾

(1) 学校からの要望への対応 (2004－2006年度)

前述したように、2004年度には、学生たちに熱心に学校ボランティアをすすめていただいた高橋耕文先生が、浅間台小学校に赴任された両角英之校長からの学生ボランティアに対する要望を伝えに来学された。3人ほどの学生がボランティアを希望し、週1～2回通うことになった。

学生たちは、朝の始業前から学校に行き、教師の手伝いをしたり、子どもたちと遊んだり、落ち着かない子どもの対応をしたり、と慣れないことを一日やって、はじめはかなり疲れたようであった。しかし、慣れてくると、子どものようなすを嬉しそうに報告してくれるように

なった。そこで、学校での経験を記録しておくように促した。浅間台小学校では、金曜日に教師たちが校内で授業を見合って、放課後に授業研究会が行われていて、金曜日にボランティアに行く学生は、授業研究会にも参加させてもらっていた。校長が学生ボランティアを要望したのは、「学校を開く」ことに向けてということで、継続的に通っている学生ボランティアは、そのうちスタッフの一人として位置づけていただき、AT(アシスタント・ティーチャー)と呼ばれていた。学生にとっては、子どもとの関わりを学べるとも貴重な機会であった。

浅間台小学校には、2004年度から始まって、その後も毎年、3～4人の学生が週1～2日、年間継続してボランティアに通った。そして毎年、その中の1～2人が小学校の教員採用試験に合格した。神奈川大学には小学校教員養成課程がないので、小学校の教員免許は、卒業してから他大学の通信課程等で取得する者が多いが、小学校のボランティアには、そうした卒業生が多く関わるようになった。

2005年度には、浅間台小学校から紹介されて、寺尾小学校にも3人の学生がATとしてボランティアに行くようになった。その中の1人は、4～5月に子どもたちと関わった経験が、6月の教育実習と7月の採用試験の力になったという。彼は、現役で出身県の中学校社会科の教員採用試験に合格し、卒業までボランティア活動を続けて学んでいた。寺尾小学校では、特別支援教育の研究指定校として、特別支援教育を教師の連携によって取り組んでいて、ボランティアに行った学生は、その点で非常に勉強になったという。

2006年度になると、ボランティア先の小学校がもう1校増え、また中学校も増えた。浅間台小学校・寺尾小学校に加えて、寺尾小学校から紹介されて、大口台小学校にも1名行くようになった。中学校は、近隣の栗田谷中学校・松本中学校である。中学校では、英語や数学など教科との関わりで、まず授業を参観したり、そ

れから授業の中で個別に支援が必要な生徒に関わったりすることが多かった。また後期になって、高橋耕文先生の紹介で、戸塚中学校に赴任された漆間浩一校長（現・横浜市教育委員会教育次長）から要望があり、2人の学生が「保健室登校」の生徒たちの学習支援に関わることになった。

以上が、学校からの要望に応じて学生がボランティアに行くようになった学校ボランティアの始まりから、徐々にボランティア先と参加学生数が増加した2006年度までの活動の概略であるが、この間、教職課程として「学校ボランティア通信」を2005年度にNo.1（2006.3.7）、2006年度にNo.2（2006.7.11）、No.3（2006.9.26）、No.4（2007.2.24）と発行した。教職課程指導室でアルバイトをしながら学校ボランティアに行っている卒業生が中心になって編集したが、学校ボランティア活動の記録として、そして、ボランティア活動をしている学生には自分の活動をふり返る機会になるように作成した。

（2）教職課程としての積極的な展開

（2007－2009年度）

① 2007年度の取り組み－ボランティア先の開拓と「学校ボランティア報告会」

2006年度までは、学校から要望があった場合に学生に情報を提供し、関心がある学生がボランティア活動を経験するという動きで、こうした動きに関わっているのも教職課程の一部の教員という状況であった。しかし、ボランティア活動に関わる学生の成長に接した教員たちは、学生が子どもとの関わり等の経験をし、そこから学ぶことでより実践的な力を獲得できる機会として、学校ボランティアの意義を実感し、2007年から、より積極的に取り組んでいくことになった。

まず、学生にとって長くて貴重な春休み（2

月～3月）を有効に使うことができるように、2007年の1月中に神奈川県内の中学校数校に「ご相談とお願い」（ボランティアの「御用聞き」）に複数の教員で回って情報収集をし、1月末に希望する学生に説明会をした。2006年度に学校ボランティアに行っていた学生も参加して自分の経験や学校からの要望を話し、教員が集めた新たな情報も説明して、自分の都合や希望が合った学生数人が、先輩が行っていた学校や新たなボランティア先に早速行くことになった。

新年度（2007年度）になって、改めて説明会を開いた。30名以上の学生が参加し、学校ボランティアに対する関心の広がりを感じたが、平日の半日～1日を継続的にボランティアに行くために確保するという時間的な都合がつかない学生も多く、結局、そのうち数人が、新たにボランティア活動を始めた。なかでも、「保健室登校」の生徒に関わる活動に対する関心は高く、前年度から継続している2名を含めて、5名の学生が戸塚中学校に通った。また戸塚中学校では、年度途中から、地域の人が運営する「土曜学校」（中学生の補習）の取り組みが始まり、そのボランティアにも関わるようになった。

こうして、2007年度には、前年度から続けている学生と新たに始めた学生を合わせて、22名の学生が、7校で継続的な学校ボランティアに関わった。そこで、学校での貴重な経験をふり返って、お互いに報告し合い、そこから学ぶ機会を何とか持ちたいと思い、1カ月に1回集まることを目標に「学校ボランティア報告会」を計画した。具体的には、学生と教職課程の教員が共通に集まれる可能性がある日程として、金曜日6限を設定した。そして7月には、ボランティア先の校長等教員の方々にも参加いただき、学生のボランティア体験のふり返りを通して、学校と大学が情報交流をめざす「学校ボランティア情報交流会」をおこなった。

報告会を通しての学習をつなぎ、また活動をふり返っての記録としての「学校ボランティア

通信」は、No.5 (2007.6.20), No.6 (2007.6.20), No.7 (2008.1.29) を発行した。やはり、教職課程指導室でアルバイトをしながら学校ボランティアに行っている卒業生が、自分も書きながら編集しているが、それぞれ貴重なふり返りの機会になっている。

以上が、2007年度の学校ボランティアの取り組みの概略である。学生がボランティア活動を通して学ぶことができるためには、活動の中で経験したことをふり返ることが重要であり、「学校ボランティア報告会」に取り組んだが、具体的にその機会(時間)をつくるのがかなり難しかった。そこで、学生も教員もそれを日常的な取り組みとして臨んでいかれるように、2008年度に向けて授業としての位置づけを検討した。

② 2008年度の取り組み—授業の開設

2008年度は、2007年度までの蓄積とその反省、すなわち、学生のボランティア活動を学びにつなげるには、活動の中で経験したことをふり返ることが重要であるが、ふり返りの機会を日常的につくり出すのはかなり難しいという反省に立って、学校ボランティアを巡る取り組みを「授業」として位置づけた。授業科目は「総合演習」とし、I(前期)とII(後期)を金曜日6限に開講し、教職課程の教員5名が関わった。正規に登録した学生は数名であったが、すでに「総合演習」履修済みの学生も参加した。学生たちは、おのおの年間を通して週に半日～1日、小学校や中学校で活動しており、月1回金曜日6限に、教員と学生全員が参加するかたちで、それぞれが学校で経験していることを報告し合い、学び合うこととした。その他にも、同じ学校に行っている者同士などがグループで集まって、情報を共有したり、困ったことについて考え合ったりする取り組みもした。

全員が集まって報告し合う授業は、実際には、月1～2回おこなった。ボランティアに行っ

ている学生全員が正規に登録しているわけではないこともあって、参加人数はその時によって違ったが、少ない時は、教員も含めて全員で経験を聴き合うことをした。参加学生が多い時は、情報共有をした後、小学校グループと中学校グループというように、2～3のグループに分かれて話し合いをした。グループの中でより具体的なことを話題にしてふり返ってみると、特に同じ学校に行っている場合には、同じ悩みを持っていたり、困ったりしていることが分かり、問題を共有して、学校で誰にどう相談していくことができるか考えてみようとするようになった。たとえば、1校に5人行っていても、1日に行っているのは1人ということであり、先生たちは忙しそうにしているので、何か聞くこともできないでいたのである。

しかし、せっかく経験させていただいているのであるから、その経験から問題を発見し、その問題を考えることによって学校を理解し、よりよい教育活動をめざしていられる力の形成につながるようなボランティア活動にするべきではないかと考え、前期の終りにボランティア先の先生方に参加していただく「学校ボランティア情報交流会」の折に、グループで先生たちと話し合う機会を持つ取り組みをした。こうして、学生の経験をより意味のあるものにしていくために、活動先の先生との連携の必要性を教員が意識するようになり、学生をボランティアとして派遣する際に、活動先の学校とこの点についての相談をしていくことの重要性を考えるようになった。

以上のように、学生が学校現場を経験することを通して実践的な力をつけることができる活動として、継続的なボランティア活動とそのふり返りの場としての授業という取り組みを中心に、2008年度は33名の学生が10校で継続的なボランティア活動に関わった。

なお、学生が自らの活動をふり返った記録としての「学校ボランティア通信」は、夏休み前の「情報交流会」に向けて、7月16日にNo.8

(小学校特集), No.9 (戸塚中特集), No.10 (松本中・栗田谷中・老松中編), 年度末にNo.11を発行した。

③ 2009年度の取り組み—授業の充実

学生が教員になっていくにあたって必要とされる「実践力」の形成に、学校現場での経験とそのふり返りは必須であると位置づけ、2009年度には、月1回の授業と「学校ボランティア情報交流会（活動先の先生方に参加していただいて7月に開催）」も充実させて、41名の学生が12校で継続的な学校ボランティア活動を展開した。また、「学校ボランティア通信」は、7月の「情報交流会」に向けて、No.12 (戸塚中・六角橋中編), No.13 (松本中特別号), No.14 (大口台小・太尾小・白幡小バージョン) を発行した。

なお、春休み及び来年度のボランティア活動を新規の学生にも呼びかけるため、後期定期試験終了時に「学校ボランティア相談会」を計画した。ボランティア先ごとの「ボランティア通信」の作成の取り組みなど、グループでの活動の展開によって、学生が自主的に活動をすすめる機会が多くなり、「相談会」も学生の自主的な動きですすめられた。

2. JYSP(神大・ユースサポート・プロジェクト)としての展開(2010年度～)

(1) JYSPの開始と地域への展開(2010年度)⁽²⁾

神奈川大学では、2010年度、横浜市こども青少年局の委託事業「平成22年度 困難を抱える青少年に対する進路選択支援事業～小・中学生を中心とした生活・学習支援モデル」を受託した。事業の委託を申請するベースとなったのは、教員をめざす学生たちが2004年度より行ってきた「学校ボランティア活動」である。

学生たちがボランティア先の学校で関わっているのが、いわゆる「困難を抱える」子どもたちであり、その子どもたちの「今」をサポートすることが、その子どもたちの将来の「進路選択支援」になると考え、「学校ボランティア活動」をさらに展開するという内容で事業の委託を申請することになった。

事業の推進体制としては、教員と職員によるプロジェクト推進体制を組み、教員をめざす卒業生などをアルバイト・スタッフに雇用して、学生のボランティア活動のコーディネートやサポートをする体制を作ることにした。こうして申請した事業の受託が7月中旬に決まり、8月から事業がスタートした。

この事業を、神奈川大学では「神大・ユースサポート・プロジェクト」(JYSP)と命名し、具体的には三つのプロジェクトに取り組むことになったが、それまでの「学校ボランティア」と違う点は、それぞれのプロジェクトを「地域の課題」への取り組みとして展開しようと計画したことである。すなわち、支援する小・中学生を、学校という「点」だけではなく、地域という「面」でとらえ、学校や地域の中で、小・中学生—大学生—大人の「育ち合う関係」「育ち合うコミュニティ」を展開させていかれるような方向性をめざした。三つのプロジェクトは、2010年度は以下のようにスタートした。

① 「学校ボランティア」—「神中ブロック」をモデルとした包括的支援プロジェクト

教職課程では、前述したように、2004年度から大学の近隣を中心とする横浜市内の小・中学校でのボランティア活動に取り組んできた。1校(3名)から始まり、2校(6名)、4校(10名)、7校(22名)、10校(33名)、12校(41名)と着実に増加し、2010年度は、12校で50名を超える学生ボランティアが活動していた。

学生たちは、週に1日(あるいは半日)朝から学校に行き、先生たちの補助をしながら、子

どもたちとの関わり方を実践的に学んでいた。そこで出会うのは、さまざまな状況の中で「困難を抱える」子どもたち——授業を落ち着いて受けることが難しい、教室に入りにくい、授業についていきにくい（外国籍で日本語が分からない子どもも含む）という子どもたち——である。

学生たちにとっては、初めて出会う状況であることが多いが、目の前に子どもがいて「待ったなし」なので「格闘」せざるを得ない。その「格闘」を続けていきながら、現場で先生たちから教えてもらったり、月に一回大学で行う学生と教員による活動のふり返りで悩みを話し合ったりする中で、子どもの状況を理解できるようになり、どのように関わったらよいか考えられるようになる。学生たちが「格闘」を続けることができるのは、「先生、来週も来てくれる？」と言ってくれる子どもたちの存在だと、彼らは言っていた。

こうした学生のボランティア活動に対して、学校側からは「とても助かっています」と感謝の言葉をいただくが、それをどのように展開させていくかについては、大学としてはそれぞれの学校にお任せの状況であった。そこで事業を受託するにあたって、学生の活動をより活発にするための大学のサポート体制を整備し、積極的にニーズを把握することをめざした。

幸い、大学の近隣の神奈川中学校・大口台小学校・白幡小学校の三校が、「神中ブロック」として小中連携の活動をすすめており、また地域の人たちが学校を支援する「学校支援地域本部」の取り組みをしていたため、その取り組みの中に加えていただいた。そして、事業スタートの8月には、小・中学生が自分の将来の夢を描く助けとなるように大人がさまざまな活動を紹介する「神中ブロック・サマースクール」で、地域の人たちとも活動することができた。このように、少しずつ「学校ボランティア」の取り組みが、地域の人たちの子どもの成長を支援する活動にもつながり始め、「地域の学校」に対

する「包括的な支援」を展望できる可能性が感じられるようになった。

② 外国につながる子どもたちの支援プロジェクト

横浜市では、外国籍の子どもだけではなく、日本国籍でも外国にルーツがある子どもを「外国につながる子ども」と言っている。「国際都市・横浜」では、多くの小・中学校で、「外国につながる子どもたち」の存在は珍しくない。しかし、そうした子どもたちが日本語を習得し、学校での学習についていくことができるように支援することが課題であるにもかかわらず、学校で受け入れていくシステムが整っていないため、日本語が分からない転校生が来ると、学校はパニックになる。大学の私の研究室にSOSが来て、中国人の留学生を連れていくこともあった。

そこで、プロジェクトの一つとして、大学が位置する神奈川区内の小・中学校に在籍する「外国につながる子どもたち」の支援に取り組むことにした。秋から2～3ヶ月の準備期間を経て、1月22日（土）から隔週土曜日の午前中に「JINDAIのびのび楽習塾」を始めた。初日は、5名の中国出身の「生徒」と6名の日本人学生と1名の中国人留学生が楽しく勉強した。

準備期間には、スタッフが近隣の小・中学校を10校ほど回って、校長先生たちの意見をききながら計画を立て、校長会でも説明させていただいたので、宣伝や連絡などで学校の協力を得ることができ、なんとかスタートすることができた。

③ 「青少年の居場所」プロジェクト

中高生が気軽に集い、仲間や異世代との交流やさまざまな体験を行える施設を、横浜市では「青少年地域活動拠点」と位置づけ、「青少年の居場所」の取り組みをしている。神奈川区で

は、大学の近くの神大寺地区センターにその拠点が設置されていて、「神中ブロック・サマースクール」で出会った地域の人が運営責任者であったため、学生と相談してボランティアに行くことにした。活動内容は、地区センターでの「居場所」の提供と、近くの小学校体育館での「スポーツ活動」（フットサル）である。

「居場所」にはさまざまな中高生が遊びに来るが、教員をめざしている学生たちは、そこで「やってはいけないことをやっている」中高生に対して、どのように接したらいいのか戸惑い、注意をしなければいけないのではないかと悩んだ。しかし、活動を始めて3ヵ月ほど経って、それぞれ少しずつ自分のスタンスで接することができるようになり、次のように言っていた学生もいる。

『遊んであげている』というのではなく、『一緒に遊んでいる』というスタンスが一番いいと感じています。・・・彼らより少しの間長く生きていく人生の先輩として、ロールモデルになれたらいいなと考えるようになりました。そのためには、私から自分の事について紹介していく必要があるのではないかと思います。』

これは、中学校の教員をめざしていた女子学生の言葉である。学生自身が異世代との交流の経験が少ない中で生きてきて、異質な異世代と出会って獲得した思いであるが、それを経験する環境が地域の人たちから与えられていたといえる。

(2) JYSPの活動による地域貢献と行政との連携の展開（2011年度～）

① 「学生にとっての学び」が「大学としての地域貢献」へ（2011年度）

以上のように、JYSPの活動を地域への展開という方向を意識してすすめたこともあって、大学の内外で、JYSPが大学の地域貢献としてとりあげられるようになった。教職課程として

は、「学校ボランティア」を中心とするJYSPの取り組みは、あくまで教員をめざす学生にとっての「学び」となることが一番重要なことであるが、その「学生にとっての学び」となる活動が、「大学としての地域貢献」になるという点で、とても意味のある活動であると考えている。JYSP 2年目の2011年度は、JYSPの活動がきっかけとなって、神奈川区や横浜市との連携の動きが展開した。

まず、2011年4月26日に神奈川区役所と神奈川大学は、「地域における大学等教育活動の発展と、安心と活力のある地域社会の形成に寄与すること」を目的として、「連携推進協定」を締結し、中島三千男学長と岡田優子区長（現・横浜市教育長）が協定書に署名した。このことによって、区内小学校長会・中学校長会や青少年地域活動拠点と関係の深い神奈川区役所区政推進課ともつながるようになり、学生のボランティア活動の地域での展開に関して協力関係を持ちやすくなった。⁽³⁾

次に、7月19日に横浜市役所広報課の事業である「市長とのぬくもりトーク」が行われた。林市長が来学され、JYSPメンバーと「ボランティア活動を通しての学び」をテーマに意見交換をおこなった。「ぬくもりトーク」に参加したメンバーは、それぞれ三つのプロジェクトに関わっている15人（直前に卒業した教員も含む）で、自分が活動を通して何を学んだかを語った。メンバーの話を聞いた市長からは、「ICTの時代で、人と人との直接の関係が希薄になってしまった今、このように愛を持って常に人と触れ合っている方々がいらっしやるのがとてもうれしく、ありがたく思います」という言葉が語られた。参加したメンバーにとっては、自分の活動の意味をふり返る機会となり、聴いている私たちにとっても、JYSPの活動が学校や地域の小・中学生との関係でどのような意味を持っているのかを考える貴重な機会となった。なお、この時のメンバーのほとんどは、現在、学校現場で教員になっている。⁽⁴⁾

②「学校ボランティア～教育実習」による学校・教育委員会との連携 (2012年度～)

前述したように、2011年度の文科省の現地視察において、JYSPの活動は高い評価を得た。しかし、それと同時に「教育実習のあり方」、すなわち、ほとんど学生の母校をお願いしている状況、そして母校のため「恩師－教え子」という関係で指導・評価が適切に行われにくいのではないかといわれる状況に対して、「母校以外での実習を半数以上にする取り組みが求められる」という指摘がされた。そこで、この指摘に対する一つの取り組みとして、一定期間(1年間)の「学校ボランティア」を条件に母校以外で教育実習を受け入れていただくことをお願いしてみることにした。何人かの校長先生たちにご意見をいただいたところ、むしろ「ボランティア活動の仕上げとしての教育実習」と、かなり積極的に考えていただけることが分かった。

2012年1月の「ボランティア演習」の授業の際に、2年生に「1年間の学校ボランティアを条件とした教育実習(母校外実習)」について説明し、希望者を募った。結果的に3名(免許教科は社会・英語・数学が1名ずつ)が希望し、それぞれ、すでにボランティアをおこなっている中学校、及び新たにボランティアをお願いする中学校、計3校に、1年間のボランティアを条件に2013年度の教育実習をお願いし、受け入れていただくことになった。

新たにボランティアからお願いした1人の学生の場合、2～3ヵ月試行期間ということで始めたが、「朝の挨拶」「帰りの報告」「生徒とのコミュニケーション」といろいろ課題があり、校長先生自ら「挨拶」「報告」の訓練をしてくださいました。校長先生自ら実行していただいたこともあって、教科担当の先生だけでなく、多くの先生方が気にかけて下さり、試行期間が終了して校長先生の改めての面接で、彼はきちんと答えるべきことを答えることができ、正式に教

育実習を受け入れていただけることになった。

このことも含めて、「ボランティア活動の仕上げとしての教育実習」において、「学び」をつくり出す「現場の力」を実感した。教育実習中に、3人のうち2人の研究授業を見学したが、一番印象的だったのは、2人とも「生徒とのアイコンタクト」ができていたことであった。3週間の実習期間では、「生徒とのアイコンタクト」ができる学生はほとんどいない。この2人もコミュニケーション能力がとりたてて優れているわけではないので、1年間のボランティアとしての生徒との関係がなければ、できなかったことであろう。2人ともができていたことに出会って、「現場の力」を実感したのである。

なお、この「1年間のボランティアを条件とする母校外教育実習」を実施するに当たっては、受入校と大学の間で協定書を作ることになり、その作業を進めた。こうした動きに対して横浜市教育委員会からは、大学と教育委員会の間で包括協定を締結し、その中で、具体的に各校と覚書を取り交わしていくというやり方が提案され、その方向で進めることになった。その結果、2013年5月30日、神奈川大学と横浜市教育委員会は、「連携のための包括協定」を締結し、石積勝学長と岡田優子横浜市教育長が協定書に署名をした。そして、2012年度に1年間のボランティアをおこなった3人の学生は、2013年6月に教育実習をおこなうことができ、前述したような成果を上げることができたのである。

以上のように、「学生の学び」という大学にとって最も基本的なことが、大学の第三の使命ともいえるべき「社会貢献・地域貢献」になるということをつくり出しているJYSPの取り組みによって、大学と行政(横浜市・横浜市教育委員会・神奈川区)の連携が進み、それが「神大生」が学校や地域で受け入れられる基盤となっていくという「いい循環」が作られつつあると言える。

(3) 外国につながる子どもの学習支援「のびのび楽習塾」(2011年1月～)

以上、JYSPの取り組みによって「学校ボランティア活動」が幅広く多様に展開していった様子を述べたが、その中で、新たな取り組みとして始めた、外国につながる子どもの学習支援「のびのび楽習塾」について、発足から関わってきた吉見（資格教育課程課）がまとめる。

① 横浜市における「外国につながる子ども」への学習支援の状況⁽⁵⁾

横浜市には外国籍の児童・生徒が2,000人ほどいるが、日本国籍でも日本語が母語ではない外国につながる児童・生徒は4,000人近くおり、その数は年々増加している(2012年5月現在)。

そのような子どもたちの日本語学習の状況について、「母語が日本語ではない、外国につながる子どもたちは来日して半年から1年ほどで、日常会話(話す、聞く)はできるようになるが、授業を理解し、読み書きが不自由なくできるようになるには5年から7年ほどかかる」と言われている(公益財団法人かながわ国際交流財団の職員の話より)。

横浜市では半年から1年の間は、日本語初期指導として、小学生には日本語講師が学校へ巡回指導にあたり、中学生は市内4か所にある日本語集中教室へ通うことができる。一つの学校に日本語指導が必要な外国籍の児童・生徒が5人以上在籍すると国際教室がひらかれ、教員が加配される(横浜市教育委員会事務局『ようこそ横浜の学校へ』2013年)。しかし、初期指導終了後の継続的なシステムとしての日本語学習やその他の学習支援は、一部の国際教室を持つ学校を除いては行われていない。

神奈川大学のある神奈川区には、中学校7校中1校、小学校19校中2校しか国際教室はなく(2010年度当時、2013年度は中学校1校のみ)、「のびのび楽習塾」の準備のために近隣の

学校を訪問した2010年11月には、日本語初期指導後の外国につながる子どもたちへの学習支援は、国際教室以外ではほとんど行われてはいないことがわかった。

② 「のびのび楽習塾」の発足(2011年1月) 一児童・生徒：6名、学生：7名

JYSPのプロジェクトの一つとして、「外国につながる子どもの支援」に取り組むことになり、2010年の秋から準備を進めた。まず、スタッフが近隣の小・中学校を10校ほど廻って、校長先生たちから実情をきいて計画をたてた。計画の作成を中心的に担ったのは、神大の日本語教員養成課程を修了したJYSPの学生スタッフと地域で国際交流活動に関わっているアルバイト職員であった。計画の概要は、隔週土曜日9時半から12時に、大学の教室で開催するということと、学生ボランティアがなるべく1対1で対応するということにした。

チラシを作成し、校長会を通じて各校に配布したところ、6名(4名の小学生と2名の中学生)の申し込みがあり、希望者の状況を把握するために学校へ出向き、本人、担任教員、可能であれば保護者と会い、日本語習得の状況などについて話し合いをした。6名の子どもたちのつながる国は中国、フィリピン、インドネシアなどであった。一方、学生ボランティアについては、隣の鶴見区で外国につながる子どもの学習支援を行っている「つるみ学習支援教室」でボランティアをしていた学生に声をかけた。そして、そのつながりで2年生を中心に関心のある学生を集め、日本人学生6名と留学生1名で学習支援をすることになり、2011年1月22日に第一回がスタートした。⁽⁶⁾

初回はまず、児童・生徒が楽しく過ごせるようにと自己紹介のゲームなどを学生が行なった。その後、1日のスケジュールを以下のとおり決めたが、それは現在までほぼ変わっていない。

のびのび楽習塾スケジュール

9:30 - 10:20	1時間目
10:20 - 10:30	おやつ
10:30 - 11:20	2時間目
11:20 - 11:45	日記
11:45 - 12:00	発表

・おやつ…授業の合間には飲み物とお菓子の「おやつ」を準備し、子どもたちが自由に交流することができるような時間を設けた。

・日記…日本語を書く力をつけるため、学習の最後に日記(今日の感想)を書き、みんなの前で発表する取り組みをした。

実際に始めてみると、学生の学習支援の力が、不十分であることがわかり、学習相談(学生ボランティアが学習支援を行うための準備)のために元小学校教員の横田さんにサポートをお願いすることにした。

③ 活動の豊かな展開に向けて (2011年度)

一児童・生徒：9名、学生：14名

新年度に教職課程が行なった学校ボランティア募集の中で「のびのび楽習塾」の宣伝もしたところ、7名の学生が希望し加わった。児童・生徒についても4月の校長会で再び募集したところ、3名の申し込みがあり、参加する子どもは9名、学生は14名になった。

隔週土曜の午前中、一人ひとりの子どもたちへの学習支援を着実にすすめるとともに、以下のようなイベントなどに取り組み、活動が少しずつ豊かに広がっていった。

- ・学習会(6月) テーマ：外国につながる子どもの現状 講師：国際教室担当の経験のある指導主事
- ・夏休みデイキャンプ(8月) 教職課程の非常勤講師が関わっている不登校支援のグループ「よいしょ」の活動への参加
- ・夏休み「宿題セミナー」の実施(8月)
- ・クリスマス会の開催(12月)
- ・「よいしょ」による人形劇の鑑賞(12月)

・学校ボランティア受入校等への「JYSP報告会」(2月) 子どもたちと一緒に「のびのび」の活動を報告

・「よいしょ」によるJAL整備工場見学(3月) 2011年度は以上の取り組みの中で、子どもたちと学生ボランティアの関係を深めていくことができた。

④ 隔週開催から毎週開催へ (2012年度)

一児童・生徒：8名、学生：15名

2012年5月から、児童・生徒にとって「土曜日は『のびのび』に来る」ことが習慣になるように、「隔週開催」を「毎週開催」にした。その他2012年度の特徴的な活動は以下のとおりである。

- ・学習会(6月) テーマ：外国につながる子どもたちへの指導法 講師：港中学校の国際教室担当の熱海先生ー小型(A3)のホワイトボードを使った作文の指導法を学習
- ・クリスマス会(12月) 紙で作ったクリスマスツリーに「今年がんばったこと」、「来年の目標」などを書いたカードを飾った。
- ・外国につながる子どもの在籍校と連携した支援
 - a. Ku中の中国籍の中1の生徒の支援：中国人留学生在が週2回学校に行き、授業の中で支援
 - b. Ka中の中国籍の中2の生徒の支援：週1～2回、学生ボランティアが放課後に学校へ行き支援
 - c. R中のアメリカ育ちの中2の生徒の支援：母親が日本人のため日本語の会話はできるが、読み書きができず授業がわからない状況で、週3回夜、大学で学生ボランティアが支援

2012年度は「のびのび楽習塾」を毎週開催し、子どもたちも「土曜日は『のびのび』に来る」ことが定着し、病気や学校行事以外で休むことはほとんどなくなった。同時に学生も子どもた

ちの意欲を感じ、横田さんで行う学習相談も毎回行なうようになった。

⑤ 世代交代による新しい風 (2013年度)

- 一児童・生徒：10名，学生：12名（4月）
- 一児童・生徒：12名，学生：16名（1月）

2013年度は初期メンバーの4年生4名が卒業し、児童・生徒が10名，学生ボランティアが12名となった。

- ・学習会（6月） テーマ：外国につながる子どもたちの背景や支援の方法 講師：国際教室担当の経験のある指導主事
- ・研修（8月） 港中学校国際教室の夏休み学習教室へ学生3人が参加，国際教室での支援を学び，その後の「のびのび」での支援に活かす

2013年度後期の学校ボランティア募集の中

で、学生ボランティアが4名増え、同時に中学2年生が2名増えた。

2013年度は、学生たちが「児童・生徒同士の交流ができるようにする」という目標をたて、ゲームなどのミニレクリエーションを毎月行うことにした。その理由は、児童・生徒の中には学校で友達がいらないという者がいるので、学校で友達ができ、学校が「居心地の良い居場所」になるように、「のびのび」のレクリエーションで、コミュニケーションの力をつけていくことが、友達をつくる力になっていってほしいと考えたからである。

以上のように、「のびのび楽習塾」の活動を展開してきたが、ここで、その展開をサポートしている横田さんに活動をふり返っていただく。

子どもの成長の一步を支える—学生ボランティアの学習支援相談に関わって

「のびのび楽習塾」学習相談担当 横田和子

のびのび学習塾での学習相談（学生ボランティアが学習支援を行うための準備）を始めて3年が経過しようとしている。3年間学生と関わってきた中で気付いたこと、課題等についてまとめてみたい。

のびのび学習塾が始まって1年ぐらひは、来日して間もないため、日本語をほとんど話せない子どもが多かった。そうした子どもたちは、学校での授業がわからないだけでなく、友達とのコミュニケーションをとるのも難しいため、クラスで孤立してしまいがちになる。そこでできるだけ早く日本の生活に慣れ、学校生活にも馴染むことができるようにということをまず第一に考えて、のびのび楽習塾でどのようなことをやればよいか、学生と共に学習内容を考えていった。また学習のことに限らず、子どもからできるだけ学校での様子を聞くことを心がけた。学校で困っていることや交友関係など、生活面で問題となることにも対応していく大切さを確認していった。私自身日本語教育の資格を持っているわけではないので、適切な日本語の指導の仕方がよくわからず、試行錯誤しながら進めざるを得なかった。それに加え当時は教材が少なく、インターネットから取り出したものの他、学生が持ってきた絵本など視覚教材を中心に活用しながら内容を考えていくような状態であった。できるだけ子どもたちが楽しく学習できるようにと、絵の得意な学生はたくさんの絵をかいてカードを作ったり、家にあるもので教材として使えそうなものを持ち寄るなど、個々人が工夫をして教材となるものを少しずつ増やしていった。普段何気なく使っている日本語を分かり易く教えることの難しさを実感しつつ、子どもたちに何とか日本語を習得してほしいという思いで取り組んでいた時期であった。

また日常会話には困らず、学校での学習内容がある程度理解できる子に対しては、学習言語を易しく言い換えたり、丁寧に詳しく説明したりしてより理解が深められるよう授業を進めていくようにした。このような子どもは学校の宿題やドリルを持ってくることが多く、その場で対応しなければならない。小学校の内容であれば問題ないと思っていたが、学生が問題の解き方を間違えて教えてしまうということが何回かあった。こうした間違いだけは避けなければいけないので、必ず教える単元の予習をし、同じような問題を解いて答えを確かめて授業に臨むことを実践してもらうようにした。

日常会話ができて日本語の読み書きが苦手な子もおり、そうした子に対しては写真や図を多く取り入れた教材プリントを作るなど、ひとりひとりの子どもの特徴に合わせた、学習しやすいものを作ろうという工夫がみられるようになっていった。

1時間の学習を進めるに当たって、まず学習内容を明確にすること、その時間の目標を学生自身がおぼろげに把握することが大切であるという観点から、簡単な学習指導計画を作成することを提案した。学習相談の時には、左側の欄に予定している教科・本時目標・学習の流れ・使用教材などを記入し、右側には当日実際やったことやその反省点、次回への引き継ぎ事項など書けるようにした。この形式については後に学生の方から、より書きやすいものになりたいという提案があり、現在もその改良されたものを使用中である。

一昨年(2012)の5月から、それまで隔週で行われていたのびのび学習塾が毎週になり、学習相談の場所も教職課程支援室へと変わった。また教材も年ごとに増え、子どもの実態に応じた難易度のあるものを選択することが出来るようになった。子どもも学生も参加率が上がり、その結果、一人の子を同じ学生が教える機会が多くなってきた。教える内容も、学校で学習していることが少しでもよく理解できるように、ほとんどの子が教科書に沿った内容になってきている。一人の子に継続的に関わることで、どの様な学習内容にすればよいかは自ずとわかってくる。学習内容を決め、その子に合った問題を作成したり、ドリルのコピーを用意した後そうしたプリント類を自分でもやって答えを確かめておく、ということが学習相談の時に積極的に出来るようになってきた。また子どもと出来るだけコミュニケーションをとることで理解を深めようとしていたり、子ども同士がお互いにコミュニケーションをとって仲間意識を持てるようにしたりすることの大切さを自覚して、進んでそうした場を作ろうと工夫する学生が増えてきている。

「今まで数学が苦手だったけれどわかるようになってきて楽しい。」「学校でのテストの点数が少しよくなった。」「のびのび学習塾に来るのが楽しみ。」といった子どもたちの声や笑顔に支えられて、どの学生も楽しく活動している。

しかし教え方については単調になってしまうこともあり、子どもがより興味を持って意欲的に学習に取り組めるような工夫をしていくことが求められている。また指導法や教材の使い方などについて、お互いの意見を出し合ってより効果的なものに高めていくというような場を持つこともあまりないので、グループでそうした話し合いが活発に出来るようになってくると、もっと質の高い学習支援が出来るのではないかと思われる。

また目の前にいる子どものことに限らず、「外国につながる子どもたち」全体に関わるような社会的状況や問題点について、もう少し関心を持って学んでいくような姿勢が見られるようになると思う。

「のびのび楽習塾」が始まってから3年、学校では自分の殻に閉じこもりがちな外国につながる子どもたちが、土曜の朝、元気に大学に通ってくる姿が習慣となり、学生が学習支援をするうえで大きな励みになっている。はじめはぎこちなかった挨拶が、学生から自然に言葉をかけることができるようになり、学習相談で準備をすることで自信をもって教えることが出来るようになってきている。子どもたちが帰った後のふり返りの時間に学生たちは子どもたちのその日の様子を語り、困ったことなどを共有し、他者の意見を聞いて、少しでもよりよい学習支援を目指して活動を継続している。

先日、高校受験を控えた生徒から、「高校に入ってから『のびのび楽習塾』に来てもよいか」と聞かれた。また生徒の保護者たちからは、「子どもの将来の夢の一つに神大に入ってこの学習支援をすることがある」「うちの子は『大きくなったら自分がしてもらったように同じような立場の子ともたちを助けてあげたい』と言っている」と伝えられたりする。これらの言葉は学生の学習支援が、子どもたちに寄り添った心の通う支援になっていると確信できる言葉である。そして、学生たちは子どもたちの笑顔を引き出し、学習への意欲へとつなげ、学習支援の体験を通して、彼らと共に成長している。

(吉見江利)

(4) 新たな取り組み「JIN-KANA学習塾」

① 「困難を抱える青少年の進路選択支援事業」の展開

2010年度に横浜市子ども青少年局の委託を受けて始まったJYSPの取り組みは、2010-2011年度と進んで、それまでの「学校ボランティア」として学校で子どもを支援するという「点」の活動から、「地域の課題」を意識して学校や地域で子どもたちを支援するという「面」の活動に展開していった。その中で、地域に暮

らす「外国につながる子ども」が学校で「困難を抱えている」という現実に出会い、2011年1月に大学で「のびのび楽習塾」を始めた。当初は、隔週土曜日の午前中におこなっていたが、子どもたちが支援を必要とする現状を自覚した学生たちから毎週おこなう提案がされ、2012年5月から毎週おこなうことになった。こうした取り組みが評価され、2012年度は、「外国につながる子どもの学習支援」がこども青少年局の助成対象となった。

2013年度には、神奈川県が、厚生労働省による「貧困の連鎖を断ち切る」という施策である、生活保護世帯の中学3年生の高校受験に向けての学習支援に取り組むということで、その委託事業を受けることになった。この事業は、全国的に取り組まれているもので、横浜市内でも委託事業として実施する区が毎年増えている。神奈川県の場合は、「のびのび楽習塾」で学んでいる中学3年生も対象にできることになった。

生活保護世帯の中学3年生は、それ以外の中学3年生の高校（全日制）進学率が90%以上であるのに対して、全日制への進学率が50%に満たず、そのほか、定時制・通信制等に進学する。「働かなければならないので定時制に進学する」のではなく、ほとんどの場合、「全日制に受からないので定時制に行く」のである。その原因は、小学生の頃からの家庭環境によって学習習慣がないこと、そして、家庭の経済的な事情によって「塾に行けない」ことである。そして、ようやく定時制に入学しても、卒業まで続けるには様々な努力が必要で、何らかの支援なしに一人でがんばることは並大抵ではないといわれる。こうして「高校中退」になり、「職業選択」から落ちこぼれてしまうのである。これが「貧困の連鎖」で、連鎖を「高校受験」のところで断ち切れぬかというのが厚労省の施策のねらいである。まさに「困難を抱える青少年の進路選択支援事業」である。

② 手探りの準備

2013年度になって受託は決まったが、前期7月ごろまでは、区役所との調整・打ち合わせと平行して、学内の体制づくりをした。実施の日時は、週2日、火曜と木曜の夜18:30～20:30、体制としては、契約職員を1名雇用し、JYSPの学生アルバイト・スタッフの2名をこの事業専任に位置づけた。実際に支援に関わるのは、「学校ボランティア」の活動をしている3・4年生と決め、免許教科(社会・英語・数学)ごとに数名ずつ、約15名の学生に声をかけた。

(区役所からは、保護世帯の中学3年生のうち15名ぐらいが参加を希望するであろうと言われたので、1対1の支援のために15名を目標にした)。彼ら／彼女らは、すでに週1日学校にボランティアに出かけており、その上、週2回の夜のボランティアになるので、どのくらい引き受けてもらえるか心配であったが、何と声をかけた学生全員が、それも喜んで引き受けてくれた。今考えると、ボランティアに行っている学校で、そのような支援を必要としている生徒に出会っていたのであろうと思われる。

大学の前期試験中(7月下旬)に、中学校の夏休み明けの8月下旬に開始、その前に8月20日からトライアルとしてスタート、と決めた。教員採用試験(一次)の結果が出るまで3週間ほどの短い期間であったが、合格した者は二次試験の準備も並行して、不合格だった者は来年に向けて力をつけるために、一次合格した卒業生スタッフを中心に、学生主体で手探りで準備をすすめた。その間には、「生徒指導論」の非常勤講師をお願いしている元校長先生に、そうした環境に置かれている子どもたちのようすや思いについてお話を伺い、子どもたちへの向き合い方について考え合ったりした。

事業の名称を考え合い、「JIN-KANA学習塾」と決めた。神大のマスコット「JINくん・KANAちゃん」からの発想であるが、「神大と神奈川区の協働による学習塾」という意味であ

る。会場は、広い大学でもなかなか適切なおとろがなく、17号館2階の先生方の会議室が夜はほとんど使用されていないので借用している。

(毎回、開始前と終了後に机とイスを移動しているが、広くて明るく、中学生にも評判がいい)。教材は、「のびのび学習塾」で「やさしい〇〇」というような問題集などをそろえていたので、それらを利用しながら準備した。また、神大で「教科教育法(社会)」の非常勤講師をしていただいている元校長の大場裕二先生にアドバイザーをお願いし、教材や生徒への接し方などについて相談に乗ってもらった。こうして、みんな緊張して初日を迎えた。

③ 4ヵ月の取り組みで学生が得たこと

初日は、生徒たちが勉強に関して必ずしもいいイメージを持っているわけではないだろうと予想して、居心地がよく、また来ようと思ってもらえることを目標にして、まず生徒たちとおしゃべりすることから始めた。1対1で、それぞれの学生が細心の注意を払って対したので、生徒たちの緊張も徐々にほぐれ、1日目の終りには、ほっとしてまた来ようと思ってもらえる雰囲気になった。こうして、生徒たちの気持ちに丁寧に向き合うことを重ねていくうちに、複数の学生が「生徒の微妙な変化に気づくことができるようになった」と自分の変化に気づいている。

通ってくる生徒の多くは、「自分は勉強ができない」「どうせ出来ない」という思いが強いので、何かできたら「ほめる」ということを大切にしたい。毎回生徒に書いてもらっている感想に、「ほめられた」という言葉がよく見られるようになった。ところが、それを「お世辞」ととる生徒もいて、「ほめられた」と実感できるには、「わかった」という達成感を感じることでできた時に「ほめる」と、「ほめられる」に値する自分を実感することができ、自己肯定感を持つことができるようになると学生は気づい

た。そして、生徒が達成感を感じることができるよう教材を工夫するようになった。

こうして、少しずつ自己肯定感が持てるようになるにつれて、生徒たちは「わからない」と言えるようになっていった。そして、なぜ学校の先生にわからないことを聞かないのかと聞く学生に対して、「今さら、そんなこと聞くのは恥ずかしいし、先生はいつも忙しそうだから」「今さら学校で聞いたら怒られそうなことを（ここでは）怒らずに優しく教えてくれるから、遠慮しないで安心して聞ける」と言っている。そういう生徒たちの言葉を聞いて、学生は「生徒は皆『わかろうとしている存在』なのです。しかし、その生徒に適した学習環境が無いために、いつの間にか『わかろうとしている存在』が『わからない存在』もしくは『わかろうとしない存在』になってしまっているのではないのでしょうか」と考えるようになっていく。

『わからないこと』を遠慮しないで安心して聞ける」と生徒に言ってもらって、学生は自分の価値を感じることができ、少しでも「わかった」という自信につながられるように取り組んでいる。このようにJIN-KANA塾は、生徒たちにとって「安心な居場所」になっているが、同時に学生たちにとっても、「教えるということ」を仲間と共に学び合える「居場所」になっている。教師をめざす学生にとって、とても良い「実践的な学び」の場になっているといえる。

3. JYSPにおける「学生の学び」を支えるしくみ

以上のように、10年の歩みを展開してきた学校ボランティアの取り組みは、教員をめざす学生にとって実践的な学びの場となっているが、そうした「学生の学び」をつくり出し、支えているのはどのようなしくみなのか、ふり返ってみる。

(1) 授業と「学校ボランティア通信」

① 「学校ボランティア演習」の授業

2011年度から「学校ボランティア演習Ⅰ」(前期)・「学校ボランティア演習Ⅱ」(後期)の授業を開講している。そこに至る経緯は、以下のようなことであった。まず、教職課程として学校ボランティアに関わることになった2007年度に、学校での活動の経験をふり返って、お互いに報告し合い、そこから学べる機会として、1ヵ月1回集まることを目標に「学校ボランティア報告会」を計画した。具体的には、学校ボランティアに行っている学生と教職課程の教員が共通に集まれる可能性のある日程として、金曜日6限を設定した。(この「金曜日6限」は、その後もずっと現在に至るまで、学校ボランティアのふり返りの機会として設定されている。)

しかし、時間割上に位置づいていないため、共通に時間を設定することがかなり難しい状況で、2008年には、学校ボランティアを「授業」として位置づけることにした。授業科目は「総合演習Ⅰ」・「総合演習Ⅱ」として、金曜日6限に開講し、教職課程の教員5名が関わった。学生たちは、おのおの週に半日～1日、小学校や中学校で活動し、月1回金曜日6限に、教員と学生が一堂に会し、それぞれが学校で経験していることを報告し合って、ふり返りの機会とした。「総合演習Ⅰ」・「総合演習Ⅱ」は、選択必修科目であるので、すでに履修して登録できない者もいたが、登録者かどうかは問題ではなく、定期的な学校ボランティアと月1回のふり返りの授業は年間を通して継続された。

こうして、おのおのの学生が現場で経験を積み重ね、それを授業でふり返るといった「学校ボランティアの学びのあり方」が定着していったが、2009-2010年度は、それがさまざまな形で充実していった。例えば、1年に1～2回、ボランティア先の先生方に参加していただいて

「学校ボランティア情報交流会」を開催したり、年度初めにボランティア募集をしていたものを、後期の授業開始時や春休み前の2月初旬にも「学校ボランティア相談会」を学生が自主的に行うなど、取り組みが充実した。

2011年度は、学校ボランティアの取り組みにとって、大きな展開の年になった。「困難を抱える青少年の進路選択支援事業」の受託によって、アルバイト・スタッフを雇用することができ、数名のアルバイト・スタッフによるサポート体制をとることができるようになったのである。アルバイト・スタッフは、学校ボランティアの経験があり、教員採用試験に向けて準備している卒業生であった。スタッフ自身も学校ボランティアの活動を行ないながら、学生たちの活動をサポートした。具体的には、それぞれ活動先の学校にボランティアに行きながら、その学校で活動している数名の学生たちの状況について担当の先生と確認したり、学生たちが困ったりしていることを把握して、相談にのったりする。そして、そうした活動を通して把握できる現状を持ち寄って、スタッフが授業を計画するという取り組みをした。

1ヵ月に1回の授業は、以下のように計画され、運営された。学生たちは、ボランティア活動をしたら、なるべくその日のうちに自分のノートに活動のふり返りと自分が感じたことを記録する。授業では、活動先の学校ごと、あるいは小学校・中学校の学校種ごとのグループで、ノートに書いた活動の記録に基づいて報告し合い、話し合う。授業の最後に感想を書き、その感想は、スタッフが学生たちの現状を把握する情報となり、日常的に学生たちと関わっていく際に参考にし、そこからまた授業を計画していくという循環で展開していった。

2011年度は、教員免許法の改正(2010年)にともなって、科目名が「学校ボランティア演習Ⅰ」・「学校ボランティア演習Ⅱ」に変更された。そして、この年に確立された、「活動-ふり返り」の循環をつくり出し継続させていく授

業のあり方は、その後も基本的に踏襲され、少しずつ改善しつつ続けられている。2012年度には、活動記録を各自のノートではなく、ボランティア日誌の用紙に書いて、コピーをスタッフのいる教職課程支援室に提出し、スタッフはその日誌を読んで、活動しているかどうかの確認と学生がどのような経験をしているかの把握をするようにした。そして、週1回のスタッフ・ミーティングで、それらの情報を次回の授業の計画づくりに活かしていくという流れを作っていた。

以上のように、JYSPの取り組みによって、数人のスタッフが学校ボランティア活動の把握に関わることができるようになり、その情報に基づいてスタッフ・ミーティングで授業を計画し、スタッフが授業を運営していくようになって、「活動-ふり返り」の循環をつくり出し継続させていく授業のあり方が組織的になったといえる。

② 「学校ボランティア通信」

学校ボランティア活動を行なっている学生が自分の活動記録を基に書くレポートを編集して「学校ボランティア通信」を発行している。No.1は2005年度に、その後、2006年度にNo.2～No.4、2007年度にNo.5～No.7、2008年度にNo.8～No.11、2009年度にNo.12～No.14を発行した。2005～2007年度は、教職課程支援室(当時は教職課程指導室)でアルバイトをしながら学校ボランティアに行っている卒業生が、自分も書きながら編集しているが、それぞれ貴重なふり返りの機会になっている。

2008年度からは、「学校ボランティア」を「授業」として位置づけ、月1回全員が集まる授業の中では、活動先ごとのグループでの話し合いが行われるようになった。そのため、「学校ボランティア通信」も活動先の学校ごと、あるいは小学校・中学校の学校種ごとに編集されるよ

うになった。そして、2010年度からは、年に2回、活動先の学校を1～3校ぐらいまとめて編集するようになり、通しのナンバーはつけなくなった。⁽⁷⁾

現在、「学校ボランティア通信」をつくるプロセスは、以下のようになっている。それぞれの学生は、ボランティア活動に行った日に自分の活動をふり返って「ボランティア日誌」を書く（教職課程支援室でコピーを取り、提出する）。月1回の全体の授業の時に、日誌を参考に報告し合う。2～3ヵ月経った時点で、日誌に基づいてA4判1枚程度のレポートをまとめる。そのレポートを「通信作成グループ」（活動先1～3校ぐらい）で集まって読み合い、通信の原稿にして編集する。1～3校分編集した通信を重ねて表紙をつけ1冊にまとめて出来あがる。

こうして出来た「学校ボランティア通信」は、夏休み前などに、ボランティア先の先生方に参加していただく「ボランティア情報交流会」で学生が報告する際の資料になる。これが、学校ボランティアの授業に関わってすすめられる、4ヵ月ぐらいにわたる通信作成のプロセスであるが、夏休みをはさんで、後期からまた同じようなプロセスを展開し、年2冊の「学校ボランティア通信」が生まれている。

以上、「学校ボランティア演習」の授業の展開と「学校ボランティア通信」作成のプロセスを述べたが、授業の展開と通信の作成がどのように関連して学生の学びをつくり出しているのだろうか。そのプロセスをたどってみる。

学生は、ボランティア活動を行なって、その活動と気づいたことをふり返って「日誌」を書く。授業では、それに基づいて、活動を通して学んだことについて語り合う。そして、活動のふり返りと仲間との語り合いに基づいてレポートをまとめる。レポートを読み合い、通信としてほかの人に伝わるように修正をし、編集をする。こうして編集した通信を資料に、授業の中で活動先が違う者同士のグループでの「ミニ・

ラウンド・テーブル」で報告し、さらにボランティア先の先生方に「ボランティア情報交流会」で報告する。

以上のプロセスを4ヵ月ぐらいでたどるのであるが、それぞれの節目で、語る相手が広がり、そのためにそれ以前の活動やレポートをふり返ることになり、それが「学び」をつくり出していると思われる。まずボランティア先が同じ仲間間に自分の活動のふり返りを語り、次に「通信作成グループ」に向けて活動のレポートを書くために仲間との語り合いをふり返り、さらに、「授業」の外に向けて通信として出していくために、レポートを「通信作成グループ」で読み合せて検討するという、それぞれの節目での「学び」がつくり出されている。その「学び」をつくり出している活動が「通信づくり」であり、その活動を支える人間関係をつくり出しているのが「授業」なのである。

(2) 学生スタッフの「コーディネーター・コミュニティ」⁽⁸⁾

「学校ボランティア」の取り組みは、2010年度に横浜市こども青少年局の委託事業を受託し、JYSPとして活動するようになってから、大きく展開した。「学生の学び」にとって、一番大きな影響を与えたのは、事業の中で雇用されるようになった学生スタッフであった。2011年度は4名のアルバイト・スタッフ（教員をめざす卒業生）を雇用した。2012年度以降は、教職課程支援室のアルバイト・スタッフが、業務の一環として、自らもボランティアに行きながら、学生の日誌を管理したり、授業を計画・運営したりして、ボランティア活動の支援をしている。

2011年度の4名のスタッフは、どのような動きをしていたのであろうか。それぞれ週1日、学校ボランティアに行き、2日大学で学生の活動のサポートに取り組んだ。具体的には、学生がボランティアに行っているかどうか学校に

行った際に把握して、行っていない場合、学生に確認するなど、学校と大学の間の情報共有を図ること、同じボランティア先の学生を昼休み等を集めて、困っていることや悩みを聞き、学生が解決できるようにサポートすることなど、学生のボランティア活動のコーディネーターの役割を果たしていた。そして、こうした役割を果たすにあたって、4人で時間を調整して相談しながらすすめていた。これが彼らと彼らのグループの力を形成したといえるであろう。

ここから、学生のボランティア活動を通しての学びをつくり出し、継続させていくためのしくみが生まれてきた。まず、それぞれの学生が自分の活動をふり返り、ノートに記録しておくこと。その記録に基づいたグループでの話し合いを通して自分のふり返りを深め、レポートを作成すること。レポートをグループで読み合っており、グループ以外にも伝わる言葉・表現を獲得すること。彼らコーディネーターは、こうしたプロセスで「通信」をつくる方法を編み出したのであるが、それは常に、学生の実態を把握し、その実態から学生が自分たちで考え合っていける方法を考えて働きかけ、その動きから次の方法をまた考え合うというプロセスで編み出していったものである。「学生が自分たちで考える」というところに、「学生の学び」がつけられる可能性があるのである。

2012年度以降は、「学校ボランティア」専任のアルバイト・スタッフは置かず、教職課程支援室のスタッフが、業務の一環として「学校ボランティア」のサポートに関わる体制になり、ボランティア・コーディネーターのグループは存在しなくなった。したがって、「必要に応じて」コーディネーターが集まって相談する体制はとれなくなってしまったが、教職課程支援室のスタッフ・ミーティングを週1回と定例化して、「通信」をつくり出していく「授業」をスタッフが運営している。

以上のように、「学校ボランティア」を通しての「学生の学び」をコーディネートする学生

スタッフは、学生たちが「自分たちで学びあう」ことができるコミュニティを形成するサポートをしているのであるが、そのコーディネーターとしての力は、自分たちコーディネーターのコミュニティで形成されているのである。こうして、それぞれのコミュニティにおける「学び」が重なり合っており、JYSPの取り組み全体が「学びあうコミュニティ」になっているといえる。教職課程における「学校ボランティア10年の歩み」は、そうした方向への歩みであったといえよう。

注

- (1) 2004 - 2009年度については、岩澤啓子・入江直子・古屋喜美代「神奈川大学における学校ボランティアの展開と課題」『神奈川大学 心理・教育研究論集』第28号 (2009年3月31日) pp.107-165 に加筆修正した。
- (2) JYSP BULLETIN 創刊号 (2010.11.4) (資料③-1)
- (3) JYSP BULLETIN 第4号 (2011.7.1) (資料③-4)
- (4) JYSP BULLETIN 第5号 (2011.10.1) (資料③-5)
- (5) 資料① 参照
- (6) JYSP BULLETIN 第2号 (2011.1.1) 及び第3号 (2011.3.1) (資料③-2, ③-3)
- (7) その後の「学校ボランティア通信」は、「通信作成グループ」(活動先1~3校ぐらい)ごとに作成した通信をまとめて表紙をつけ、年に2回発行されている。2013年度については、資料④-1及び④-2参照
- (8) 資料② 参照

本稿全体の筆者は、入江直子(教職課程)であるが、2-(3)は、吉見江利・横田和子(資格教育課程課)が執筆した。

「JINDAIのびのび楽習塾」(大学生の外国につながる子どもへの学習支援) —2年間の展開をふり返り学生の学びと課題を見る— 2013. 1. 13 神大・ユースサポート・プロジェクト (JYSP) 入江直子・横田和子・吉見江利

神大ユース・サポートプロジェクト (JYSP) は

神奈川大学(横浜)教職課程が2010年、横浜市こども青少年局から「困難を抱える青少年に対する進路選択支援事業～小・中学生を中心とした生活・学習支援モデル」を受託してとりくんでいる。

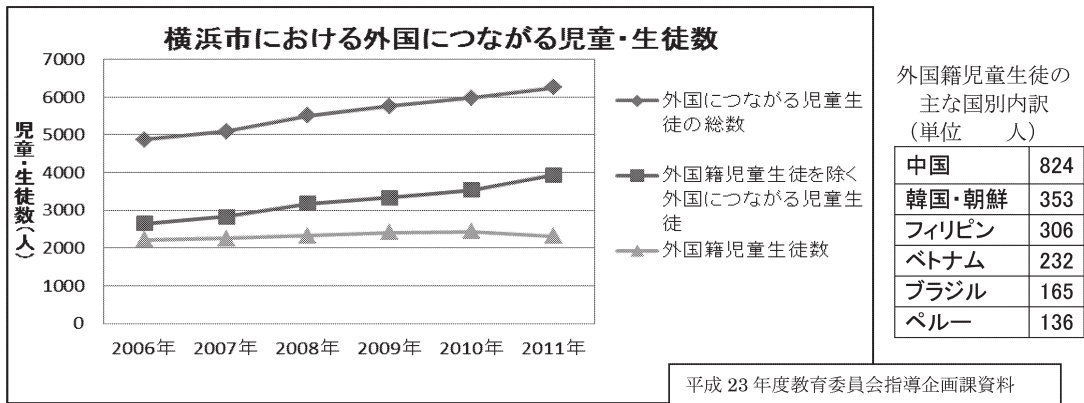
主な活動は①近隣の小・中学校14校に学校ボランティア ②地域の青少年の居場所の活動 ③「JINDAIのびのび楽習塾」

「JINDAIのびのび楽習塾」は外国につながる子ども¹たちの学習支援活動を行っている。



¹ 外国籍の子どもだけでなく、日本籍でも外国にルーツのある子ども、外国で暮らしていた子どものこと

1. 横浜市の外国につながる子どもたちの現状



横浜市の外国につながる子どもへの支援体制

- ・ **国際教室**…日本語初期指導が必要な児童・生徒5名以上に対して、担当教員を1名配置
 20名以上の場合は “ ” 2名配置
 担当教員は日本語指導、教科指導、生活適応指導等を行う。
- ・ **日本語教室**…集中教室(市内4カ所に設置)子どもたちが教室へ通う。週2回(計40～60回/年)
- ・ **派遣指導**…日本語講師(全市で28名)が学校へ行き日本語の初期指導をする。週1回(計20～30回/年)

2. 「JINDAIのびのび楽習塾」の現状

《参加児童生徒(つながる国)》 9名

小学生2名(ガーナ、中国)、中学生7名(中国、ガーナ、フィリピン、米国、インドネシア)

《スタッフ(支援者)体制》 17名

職員1名、アドバイザー(学習相談)1名、学生ボランティア13名、社会人2名(4年生4名、3年生5名、2年生4名)

《学習教室の様子》

- ・ 基本的に個別指導を行う
- ・ 間におやつ時間を入れ子ども同士、学生も交流
- ・ 日記を書いて発表する

母語、第二言語の習得の問題

「のびのび楽習塾」の中国籍の子どもの現状として、小学校低学年から中学年で来日し、1年程の日本語初期指導によって生活言語はある程度修得するが、授業を理解するための学習言語の修得が保障されていない。

在日年数が5～6年と長くても、日本語の読み書きの力はほとんど身につけていない。それに加えて母語の中国語も来日以来、学習していないため、中国語の読み書きの力もない。

アイデンティティの問題としても「母語保障」の課題も大きい。今後、日本で暮らしていくために第二言語としての日本語の読み書きの力をつける必要も痛感する。

3. 活動のあゆみ

2010年 11月 区内小中学校校長会で「JINDAIのびのび楽習塾」の案内をする

2011年 1月 「JINDAIのびのび楽習塾」開始、子ども6名(小学生4名、中学生…2名)

大学内の教室で隔週土曜に行う 支援者8名…(学生3名、スタッフ3名、留学生1名、社会人1名)

4月 学生ボランティア説明会実施、校長会で再度案内(子ども9名、学生14名になる)

6月 元中学校国際教室担当指導主事による学習会

8月 NPO主催のディキャンプに参加(子ども4名、学生4名)

8月 夏休み宿題セミナー実施

12月 クリスマス会、学生による人形劇

2012年 2月 《JYSP報告会》(子どもと学生が区役所関係者や近隣の学校長に活動を報告)

3月 NPO主催のJAL整備工場見学に参加、(子ども3名、学生4名)

「JINDAIのびのび楽習塾」を毎週行うことにする

(社会人2名)

5月 子ども8名、(小学生2名、中学生6名)、支援者(学生15名、スタッフ2名)

6月 港中学校国際教室担当教諭による学習会

7・8月 《港中学校国際教室の夏休み支援》(学生6名参加)

8月 夏休み宿題セミナー実施

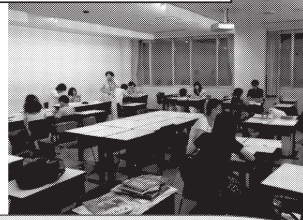
9月 NPOと県教育委員会主催の「日本語を母語としない人たちのための高校進学ガイダンス」に参加(子どもと保護者2組)

10月 留学生(中国人)が中国籍生徒の中学校に outward 母語を含めた学習支援を開始

11月 8月にアメリカから来た生徒(母親が日本人)の日本語の読み書き支援を週3回、夜、教職課程支援室で開始

12月 クリスマス会

学習の様子：個別指導



子どもたちが毎週来ることが定着し、学校の勉強を自主的に持参し、意欲を出す子どもも出てくる

学習の様子：日記の発表



2012・12 クリスマス会



現在まで、「JINDAIのびのび楽習塾」を60回開催、(2011・1～2012・3…30回、2012・4～12…30回)

4. 2年間をふりかえって (学生へのアンケートより)

活動を通しての変化

子どもの変化 支援の継続による変化

- ・継続して支援をしていくことで子どもが「楽しいから来る」から「わかることが嬉しい」「わかっていくことで自信がついてきた」に変わっている。
- ・特に2年目から毎週学習支援を継続的に行うことで、学校の状況にあわせた学習をすることができ、このことが次の勉強の動機や意欲につながっている。

学生の変化

- ・当初は日本語の支援をしたいという軽い気持ちで参加し、子どもに継続して来てもらうために楽しいイベントを計画していた。2年目に入り、毎週支援を行うことで子どもが自然と来るようになり、学習準備に力を入れ「みている子どもができるようになると嬉しい」と感じるようになる。
- ・現在中2が数名おり、1年後には高校受験を控えており、状況は厳しい。学生は「楽しく」から受験にどう対応できるかに変化。
- ・子どもの状態をみながら、これをやった方が良いと自ら判断し準備しかけている。
- ・教師として必要な子どもの実態の把握など基本的なことの力不足を認識しはじめた学生もいる。

課題

- ・教えるために必要な子どもの実態把握や教える方法に関する支援学生の力不足
- ・支援の力不足や高校受験への対応という課題のための学習会の開催
- ・「JINDAIのびのび楽習塾」の支援を通して横浜市の学校での支援体制の充実の必要性を痛感した

コーディネーターグループとしての学生スタッフの役割

～JYSPの活動と学生の学びをふり返って～

2013. 12.1

神大・ユースサポート・プロジェクト (JYSP)

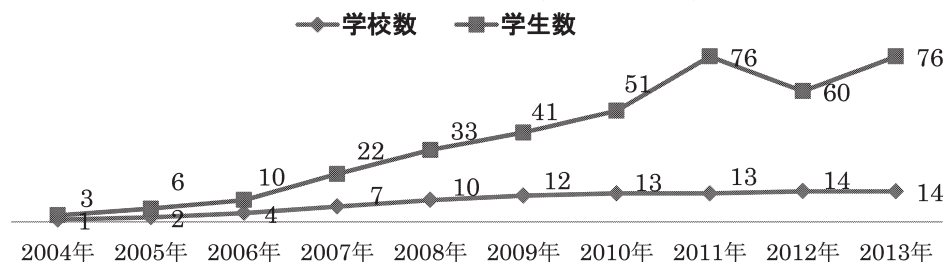
入江直子・横田和子・吉見江利

神大ユース・サポートプロジェクト (JYSP) とは (Jindai Youth Support Project)

横浜市子ども青少年局による「困難を抱える青少年に対する進路選択支援事業」を受け、神奈川大学(横浜) 教職課程が2010年より取り組んでいるプロジェクト。

- ① 近隣の小・中・高等学校 (14校) での学校ボランティア活動
- ② 地域の青少年の居場所活動
- ③ 「JINDAI のびのび学習塾」(外国につながる子どもたちの学習支援活動)
- ④ 「JIN-KANA 学習塾」経済的に困難を抱える生徒の高校入試への学習支援活動

学校ボランティアの学校数と学生数の推移



特徴

- ① 学校ボランティア演習(教職課程の授業)とリンク
ボランティアを行う学生は、活動後にボランティア日誌を作成し、それにもとづいて、月1回の授業(第1金曜18:00-19:30)で、グループの中で活動をふり返る
- ② 学校ボランティア演習の運営等を学生スタッフが行う
学校ボランティアの活動は2004年から始まったが、2010年からはJYSPが市の委託を受けたことにより、ボランティア経験者の学生スタッフがアルバイトとして、ボランティア活動の全般的な支援をしている

学生スタッフの役割

- ① 教職課程支援室でボランティア先の学校毎に学生のボランティア日誌を受け取り、担当の学校のボランティア活動を把握する
- ② 週1回のスタッフミーティングで学生の活動状況を共有し、学校ボランティア演習の授業を企画する
- ③ ボランティア通信作成の支援

ボランティア通信発行のプロセス＝(一人ひとりの学生が、ボランティア日誌に基づいてレポートを書き、そのレポートを学生同士が読み合い、通信の記事を作成し、編集する)

※「活動記録の書き方」について(授業のレジュメより)

その日のボランティア活動を通じて自分がどのように感じたのかを書く(例)良かったこと、失敗したことなど具体的に、なぜ失敗したのか、どうすればよいのかなど

コーディネーターグループとしてのスタッフの活動の展開と学び

2010～11年度 事業受託後、4名の学生アルバイトスタッフ、専用の部屋、スタッフミーティング
学校ボランティア演習の授業を中心に以下の動きが始まった

- ① ボランティア活動をノートに記録
- ② 記録にもとづいてレポートを提出
- ③ レポートを読み合って通信にする

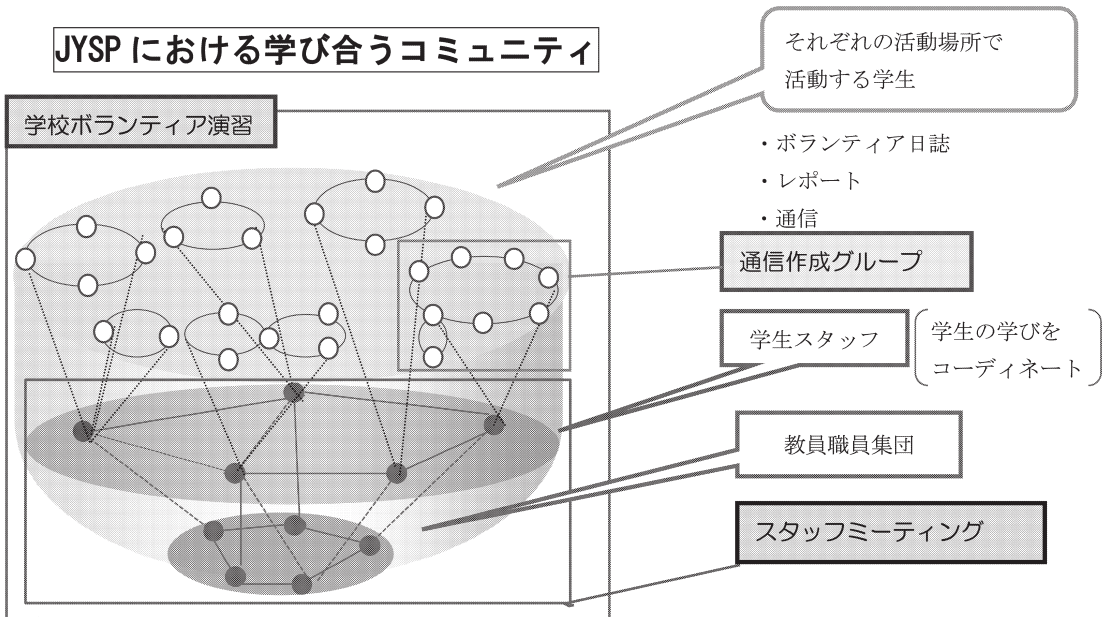
2012年度 学生アルバイトスタッフ5名（教職課程支援室のスタッフが兼ねる）

活動記録用のボランティア日誌の用紙を作成し、日誌のコピーを教職課程支援室に提出する
日誌のファイルによって、ボランティア学生との関係が深まると共に学生の活動を把握できるようになった。

2013年度 学生アルバイトスタッフ5名（教職課程支援室のスタッフが兼ねる）

学生スタッフ主体の週1回のスタッフミーティングが定着し、授業に向けて様々な工夫が生まれている

- ・一人ひとりのボランティア活動の目標を明確化する取り組み
- ・学生の悩みや意見をもとに、話し合いのテーマを設定する活動



学生スタッフのコーディネーターグループとしての学びの意味

- ◆ 学生スタッフは、それぞれ担当のグループの学生の相互の学びを作り出している
- ◆ 授業の動きを通して、半年に1度、活動をしている学校毎に学校ボランティア通信を発行するプロセスを支援している
- ◆ スタッフミーティングで担当しているグループの活動と自身のコーディネーターとしての活動を検討し合うことで、次の展開を進めている
- ◆ それが学生ボランティアの学びの支援と、自分たちのコーディネーターグループとしての成長につながっている

JYSP BULLETIN

創刊号
2010.11.4
発行

○事業概要○

「^{ジスブ}神大・ユースサポート・プロジェクト（JYSP）」は、横浜市こども青少年局の「平成22年度 困難を抱える青少年に対する進路選択支援事業～小・中学生を中心とした生活・学習支援モデル～」を受託した、学生とともに取り組むプロジェクトです。

教職をめざす学生たちの「学校ボランティア活動」を中心に、様々な理由で困難を抱える子どもたちの伴走的な支援を大きく3つのプロジェクトとして取り組みます。

①「神中ブロック」をモデルとした包括的支援プロジェクト

神中ブロック（神奈川中・白幡小・大口台小）で、困難を抱える子どもたちを支援する「学校ボランティア活動」を展開し、「学校支援地域本部」の取り組みと連携して、包括的なネットワークを形成します。

②「外国につながる子どもたちの支援」プロジェクト

神奈川区内の小中学校で増え始めた「外国につながる子どもたち」に対して、留学生を含む学生ボランティアが生活・学習支援を行います。

③「青少年の居場所」プロジェクト

「青少年地域活動拠点」（神大寺地区センター・中丸小学校体育館）の取り組みに学生ボランティアが関わります。

以上のプロジェクトに関わる者が、相互に情報を交換・共有し検証するために、**<インターネットを通じたプラットフォームの形成>**に取り組みます。

「ポートフォリオシステム」を活用して、ボランティア活動の報告やそれに対する各方面からのサポートなどの情報を蓄積します。また、地域、学校、行政、大学という子どもたちを支援する多様な主体が相互に情報交換をし、評価・検証するための仕組みを構築します。

★11月4日 キックオフを迎えて★

人間科学部 教授 入江直子



神奈川大学横浜キャンパスの教職課程では、2004年度から横浜市内の小中学校でのボランティア活動に取り組んできました。1校（3名）から始まり、2校（6名）、4校（10名）、7校（22名）、10校（33名）、12校（41名）と着実に増加し、2010年度は、12校で50名を超えています。学生たちは、週に1日（あるいは半日）朝から学校に行き、先生たちの補助をしながら、児童生徒たちとの関わりの中でさまざまなことを実践的に学ぶチャンスを与えていただいています。そして、月に1回、ボランティア学生と教員全員が集まって、活動をふり返り、さらに学びを深めています。

今回、「神大・ユースサポート・プロジェクト（JYSP）」として横浜市こども青少年局の事業を本学が受託したことを、学校ボランティア活動が「質量ともに」豊かに発展していく契機にしたいと思っています。

学生たちがボランティア活動を通して成長し、そのことが次の世代の子どもたちの成長支援につながるよう、取り組んでいきたいと思っておりますので、先生方や地域の方たちに暖かく厳しく見守っていただきたいと願っています。

△活動の様子△

横浜市立白幡小学校には、AT4名と土曜塾に5名の学生ボランティアが活動をしています。そのうちの万江光理さんが、白幡小学校の学校便り10月号『特集ATの1日』に登場しました。その他、神中ブロックでは、大口台小学校に3名、神奈川中学校に5名と多くの神大生が活躍しています。



↑ 中丸小学校でのフットサル

◇Interview◇ 人間科学部4年 田中僚さん

Q1 どんな活動をしていますか？
毎週月曜日には青少年地域活動拠点の神大寺地区センターで地域の中・高校生と交流、火・金曜日には中丸小学校体育館で小・中学生とフットサルをしています。

Q2 活動は、順調ですか？

最初は、声をかけられなかったけど、一緒にフットサルをやることで話ができるようになりました。最近は、小・中学生から話しかけてくれるようになってきたので、毎回行くのが楽しみです。

Q3 最後に一言

多くの子どもたちと接することが教育現場で活かせると思うので、時間のある限り続けていきたいです。

アシスタントティーチャーの1日

「のびのびと！、アシスタントティーチャーの1日」

アシスタントティーチャーの1日とは、授業補助や教材準備、授業準備、授業後の片付けなど、授業に関わる様々な業務を行います。アシスタントティーチャーは、教員と協力して授業を進め、学生の学習をサポートします。アシスタントティーチャーは、教員と協力して授業を進め、学生の学習をサポートします。

項目	内容
日時	2014年3月15日(土) 10:00~16:00
場所	神奈川大学 横浜キャンパス 19号館217号室
参加者	人間科学部 4年生 田中僚さん
講師	人間科学部 教員 入江直子先生
内容	アシスタントティーチャーの業務内容について、入江先生から説明を受けました。その後、入江先生と協力して授業を行いました。授業後は、入江先生から授業の振り返りを行いました。
感想	アシスタントティーチャーの業務内容について、入江先生から説明を受けました。その後、入江先生と協力して授業を行いました。授業後は、入江先生から授業の振り返りを行いました。



↑ 白幡小学校 学校便り10月号

◎ボランティア情報交換会◎

月1回、異なる学校でボランティア活動をする学生たちが集まり、報告会を行っています。

報告会では、ボランティア先での活動報告や悩みや課題などを仲間と共有し、学生同士が互いに切磋琢磨して成長し続けています。



□JYSPスタッフ紹介□



人間科学部
教授
入江直子



教務課
沖田智大



JYSP スタッフ
吉見江利



JYSP スタッフ
鈴木和佳



学生課
課長
千葉陽史



JYSP スタッフ
吾妻清美



JYSP スタッフ
木村正人



JYSP スタッフ
池永遠太

JYSP事務局

【場所】横浜キャンパス19号館217号室
【TEL】045-481-5661 (内:4433)

【開室時間】10:00 ~ 18:00 (平日) *土日祝は閉室
【E-MAIL】jy-sp-2010@kanagawa-u.ac.jp



JYSP BULLETIN

神大・ユースサポート・プロジェクト(JYSP) KICK OFF MEETING を開催しました。



2010年11月4日(木)、神奈川大学横浜キャンパスにて、「神大・ユースサポート・プロジェクト(JYSP)」KICK OFF MEETINGを開催し、横浜市子ども青少年局長、神奈川区長を始めとする行政、教育委員会、学校、地域など多くの方々にご参加いただきました。

第一部基調講演では、全日本中学校長会会長新藤久典先生に「育ち合う地域づくり」というテーマでご講演いただき、参加者の学生からは「新藤先生の熱意が伝わってきて、参加して良かった」、また本学の教職員からは「もっと多くの学生に聞かせてあげたかった」など、大変ご好評をいただきました。



同日、横浜市庁舎において、横浜市の林文子市長による記者発表が行われ、プロジェクト代表の人間科学部教授 入江直子先生が同席しました。

— 外国につながる子どもたちの支援プロジェクト —

2011年1月22日(土)から

「JINDAI のびのび 楽習塾」がスタート!

●日時 土曜日 9:30～12:00

2011年1月22日・29日

2月19日

3月5日・19日

※2011年4月以降については、決まり次第お知らせします。

●場所 神奈川大学 横浜キャンパス内

●対象 神大近隣の小・中学生
(外国につながる子どもたち)

神奈川大学近隣の小・中学生(特に外国につながる子どもたち)を対象に、学校でわからないところや宿題などを、教員を目指す教職課程の学生たちが学習サポートを行います。また、外国につながる子どもたちのために、学校の勉強だけでなく日常生活の相談も受け付けます。

児童・生徒が持ってくる教科書などを使って、卒業生の教員免許取得者や日本語教員養成課程修了者及び教職課程を履修している学生が基本的に1対1で支援します。

♪詳細については JYSP 事務局までお気軽にお問い合わせください♪

活動中の学校・施設



約60人の学生が活躍

- 1 ハートフルスペース都筑
- 2 つるみ学習支援教室
- 3 松本中
- 4 栗田谷中
- 5 六角橋中
- 6 神奈川中
- 7 菅田中
- 8 白幡小
- 9 大口台小
- 10 斎藤分小
- 11 二谷小
- 12 神大寺地区センター
- 13 浅間台小
- 14 老松中
- 15 間門小
- 16 戸塚中



▲別室登校学習支援



▲部活動指導



▲A T



支援や連携で学校を開くということ

横浜市立神奈川中学校 校長 鈴木英夫



JYSPの取り組みで、神奈川中学校には、野球部の指導支援をいただいている田中さん、中島さん、授業支援で柿沼さん、鈴木さん、池永さんという5人の方たちに支援をいただく体制になりました。おそらくこの学校でも一番不足しているのは、施設でも予算でもなく、マンパワーだと思います。その点、神奈川中学校は神奈川大学のご支援を頂いて、ほんとうにありがたく思っています。

来て頂いている学生さんや関係者の方たちは、責任感や行動力があり、子どもたちにとっては頼もしいお兄さん、お姉さんになっていただいています。いつもは職員室のカウンセラー席を使っていますが、職員室に神奈川中学校の教員ではないけれども、神奈川中をサポートする人が毎日誰かいるということは、職員室の会話や業務の信頼性を高めるためにもたいへんありがたいことだと思っています。ボランティアとしてどのように関わっていいのかご本人たちも戸惑っていることもあり、もちろん学校側もどのように関わっていただくのがいいかまだ、戸惑っている面もあります。こちらとしても改善していきたいと思っています。

時折頂くボランティア報告集からは、皆さんの真摯にボランティアに取り組んでいるきもちが感じられると同時に、学校や教職員をしっかりとっている記録になっていますので、学校が若い方たちのお手本にならないといけないということが分かり、襟をただす思いです。支援に来て頂いている方たちは、教職を目指している方や学校等でのカウンセラーを希望している方たちですので、学校としても支援をいただくだけでなく、将来の横浜の子どもに関わる仕事に就く方たちなので、大切に育てていきたいと考えています。

【編集後記】初めての編集で大変でしたが、何とか完成することができました！JYSPでは、学生の活動や子どもたちの笑顔が原動力になっています。また、1月から「JINDAIのびのび楽習塾」も始まり、多くの活動が広がっています。 JYSPスタッフ 池永・鈴木

JYSP事務局

【場所】横浜キャンパス19号館217号室
【TEL】045-481-5661 (内:4433)

【開室時間】10:00 ~ 18:00 (平日) *土日祝は閉室
【E-MAIL】jy-sp-2010@kanagawa-u.ac.jp



JYSP BULLETIN

第3号
2011.3.1
発行

外国につながる子どもたちの支援プロジェクト 『JINDAIのびのび楽習塾』 2011年1月22日よりスタート!

昨年10月から準備を進めてきた「JINDAIのびのび楽習塾」も、大学近隣の小・中学校から6名の児童・生徒と2名の大人が塾生として参加し、無事に3回目を終えることができました。

楽習塾の塾長である人間科学部2年上野さんを筆頭に、教職志望の学生たちが日々活発な意見交換を行い、塾生が楽しめる学習計画を立てられるよう工夫を重ねてきました。学生たちは、毎回子どもたちの笑顔に励まされながら、振り返りを行い、次の準備を行っています。



学習風景

1日のスケジュール

- 9:30 ~ 開始
個別支援
- 10:30 ~ グループ学習
- 11:30 ~ 日記
感想
- 12:00 終了

宿題や授業でわからないことを個別に支援！
学生達は子どもたちが楽しく学習できるようサポートしています。

ひなまつりが近かったので、ひなあられを入れる箱を折り紙で作りました。また、地図を使って子どもたちそれぞれの「自分の生まれた国」を紹介してもらいました。

最後に学習日記を書いて日記を発表しました。発表することでお互いを理解し、積極的にコミュニケーションが取れるようになりました。

教育研究交流会

2月5日(土) 神奈川大学横浜キャンパスにて、卒業生の教員、ボランティア学生、ボランティア先の小・中学校の先生、教職課程の教員などが集い、教育研究交流会を開催しました。

第一部では、新藤久典先生(全日本中学校長会会長)による講演、学校ボランティア活動を通じての学びの報告と活動先の先生方からの感想や学生に対する思いなどが語られ、白幡小学校と神大寺地区センター(青少年地域活動拠点)の2箇所について報告がありました。

「学び」の報告では、白幡小学校ATの人間科学部4年結城巴貴さんより高木先生のクラスでの一年間の活動についてのふり返りが行われ、「児童の心の成長」について語る結城さんの姿に高木先生が涙するという場面もありました。

また、人間科学部3年の近藤桃子さんによる神大寺地区センターでの活動についての報告では、困難を抱える青少年との交流を通じ、『生きたロールモデル』として彼らに少しでも良い刺激を与えたい。そして、年の近い先輩として、よき理解者として共に成長し合いたい」という思いが語られました。



▲交流会での様子



▲ラウンドテーブル

白幡小学校・大口台小学校 (神中ブロック)の 活動紹介

活動についてインタビュー!!

大口台小学校

法学部 3年 青木利成さん

子どもたちの目線に立ってサポートできる様、常に気を配りました。子どもたちから「先生!」と呼ばれるととても嬉しくてやりがいを感じます。最初の頃は、一人を見るのが精一杯でしたが、最近はクラス全体に目が行き届くようになりました。これからもコミュニケーションを大切にして、子どもたちとの距離をもっと近づけたいと思います。

人間科学部 4年 倉持恵さん

活発な児童のサポートに入り、いろいろ考えさせられながら対応することが多かったのですが、ここでの活動が教育実習に大変役立ちました。自分が心を開くだけではなく、児童の心に注目していく大切さを学びました。

白幡小学校

外国語学部 2年 桐戸志帆さん

「なかよし英語教室」で、多くの児童から英語が楽しいと言ってもらえる様に心がけました。児童が積極的に手を挙げてくれる時が嬉しいです。自身も前向きに意見を出して教壇に立てる目標に向けて頑張ります。

外国語学部 3年 池田絵美さん

私は小学生が苦手だったのですが、このボランティアを通して子どもたちとスムーズに付き合えるようになりました。今後は活発な子だけでなく、より多くの児童にも関わる様に工夫したいです。

工学部 2年 大野木駿さん

「土曜塾」にて、算数・国語を基本に学校の宿題やドリルなどの補習に関わっています。児童にまんべんなく目を配る様に心がけました。低学年の児童は5分~10分で集中力が切れるので、今後は時間配分も考えて取り組んでみようと思っています。

☆ JYSPスタッフ ☆

卒業 鈴木和佳さん



JYSPでは、「外国につながる子どもたちの支援」を担当し、また、英語科ATとして神奈川中学校に携わりました。JYSPでの活動の中で「JINDAIのびのび楽習塾」を企画して実現するまでは、初めてのことで大変でしたが、なんとか無事にスタートすることができました。ここでの活動は、教職を目指す私にとって、とても良い経験になり、この春から教壇に立つことができます!! 9月末からの半年間という大変短い間でしたが、先生方をはじめとするスタッフのみなさん、そして学生のみなさん、ありがとうございました。ひとまわり成長してまた遊びにきます♪

歓迎! 新スタッフ 4名

左:久保山さん 学生の皆さんの活動は、私が、今まで関わったことなかったことばかりで、とても新鮮な気持ちです。ボランティア活動について勉強しながら皆様のお役に立てる様、頑張ります。

中:伊藤さん 教職を目指す学生の皆さんと活動を共にしながら、初心に立ち返る大切さを感じています。JYSPでの活動を通して、共に育ち合える環境を皆で作っていかれたら嬉しく思います。

右:長岡さん JYSPの活動に励む学生の姿から、日々エネルギーをもらっています。学ばなければならないことは、まだまだたくさんありますが、活動をしっかりサポートしていけるよう、多くのことを吸収し自身も成長していきたいと思っています。



<アドバイザー:横田さん> 毎週月・水・金 13:30 ~ 17:00

元小学校教員の現場経験をいかし、皆さんのボランティアの活動を総合的にサポートします。

JYSP事務局

【場所】横浜キャンパス19号館217号室
【TEL】045-481-5661 (内:4433)

【開室時間】10:00 ~ 18:00 (平日) *土日祝は閉室
【E-MAIL】jy-sp-2010@kanagawa-u.ac.jp

KU
KANAGAWA UNIVERSITY

JYSP BULLETIN

第4号
2011.7.1
発行

神奈川区役所と連携推進協定を締結！



2011年4月26日（火）学校法人神奈川大学と横浜市神奈川区役所は「地域における大学等教育活動の発展と、安心と活力のある地域社会の形成に寄与すること」を目的として、相互の協力および連携に関する協定を提携しました。

詳細は、大学 HP プレスリリースに掲載しています。
<http://www.kanagawa-u.ac.jp/pressrelease/2011/>

◀右：神奈川区 岡田優子区長
左：神奈川大学 中島三千男学長

続！「JINDAI のびのび学習塾」外国につながる子どもたちの支援プロジェクト

2011年1月からスタートした「JINDAIのびのび学習塾」は、現在、小学校から大人（保護者）までの10名が学習言語の修得や日本語などを学習しています。

開講	6月25日（土）
予定	7月9日（土）、23日（土）

『JYSP 2年目の展望』

人間科学部 教授 入江 直子

昨年8月にスタートしたJYSPは、年度が変わり2年目を迎えました。JYSPを始めるにあたっては、以前からすすめてきた「学校ボランティア」を中心に、新たに「外国につながる子どもたち」の支援と「青少年の居場所」の活動を目標に掲げました。

JYSP部隊は、教職課程を履修している2年生～4年生（「教職浪人」の卒業生を含む）50名余の学生たち、3名の事務局職員、2名のアドバイザー・スタッフで編成されています。組織的とは言い難い状況ですが、一人ひとりの学生が「自分の持ち場で」一生懸命取り組んでいて、全体として見ると大きなプロジェクトになっています。

「学校ボランティア」は、今年度、神奈川区内では5つの小学校（大口台・白幡・二谷・斎藤分・神橋）と3つの中学校（神奈川・栗田谷・松本）、区外では戸塚中・老松中などで、普通学級や特別支援学級でのAT（アシスタント・ティーチャー）、保健室登校の生徒の支援、土曜補習塾などに関わっています。「外国につながる子どもたち」の支援では、今年1月から隔週土曜日の午前中に大学で開催している「のびのび学習塾」に、近隣の小中学校（斎藤分小・南神大寺小・栗田谷中・六角橋中など）から子どもたちが通ってきています。「青少年の居場所」の活動では、地区センターで中高生とバンドの練習を一緒にしたり、小学校体育館で地域の子どもから大人までの人たちとフットサルをしたりしています。

こうしてみると、対象地域は大学の近隣に限られていますが、3つの活動目標に向けてすすめてきた取り組みを通して、学生たちは地域の子どもたちに出会い、子どもたちの学習や活動に関わっています。このようなJYSPの活動がベースになって、このたび神奈川大学と神奈川区が「連携推進協定」を締結したことはとてもうれしいことです。

そして、月に1回、学生たちと6名の教職課程の教員が参加してボランティア活動の報告が行われる授業での「活動のふり返し」を通して、学生たちの確かな成長を実感することができます。2年目の今年は、学生たちとともに活動しながらボランティアの授業を運営している「教職浪人」の卒業生4人がいます。その取り組みがどのような動きを生み出すか楽しみです。

横浜市立
白幡小学校

経済学科4年 宮本 薫裕さん

照れくさそうな表情を見せながらも、子どもたちの話になると笑顔で楽しそうに話してくれました！



Q: 活動内容を教えてください。

A: 毎週金曜日8:00～15:00に、白幡小学校の特別支援学級で子どもたちの自立を支援するため、一緒に遊んだり、学習サポートをしています。

Q: 活動をして初めての感想は？

A: 子どもたちに教えたことができるようになったときが一番嬉しくて、やりがいを感じます。

Q: 宮本さんの今後については？

A: 卒業するまでこの活動をして、早く教員になれるように頑張ります。



「子どもの未来への夢を育む 地域コミュニティーの実現」

横浜市立白幡小学校 校長 永池 啓子

3月11日東日本大震災は、未曾有の被害をもたらしました。改めて、人は、自然によって生かされていること、人は、支え合って生きていることを学んでいます。そのような中、被災地からは「地域コミュニティーが、一つの大きな“家族”であること」を、私たちの目に見える形で示してもらっているように思われます。

国民の一人ひとりが、今、自分ができることを精一杯考え、心を尽くすことが、被災地の、そして、日本の復興に繋がると受け止めています。白幡小学校が目指したいことは、これからの日本の未来を築いていく子どもたち“どの子にも学力を付けること”です。また、“子どもが未来へ夢を育む学校、白幡小コミュニティーの実現”は、2020年までを一区切りとする長期の学校経営ビジョンでもあります。

本校では、“どの子ども幸せに生き抜いていくための学力を付ける！”を合言葉に、学校の教育活動の充実とともに、家庭学習との接続、そして、地域の学習ボランティアの皆様からは様々な支援をいただいております。中でも、ここ数年、地域の大学である神奈川大学からの支援、並びに協働の事業が、年々充実してきて有難い限りです。例えば、平日のAT(アシスタントティーチャー)、土曜塾「読み書き算」や「なかよし英語」等、大勢の神奈川大学の学生さんや先生方からのサポートをいただいております。

このような中、神大の学生さんたちの中から“教師を目指す人”や“教育関係に携わりたい人”が次々に生まれてきていくことも嬉しいことですし、一方、学校は、夢の実現を目指す若者たちから大きな活力を得ています。また、昨年度から始まったサマースクールは、正しく、子どもを中心とした「地域コミュニティー＝“家族”」の一つの実現でした。国難を乗り越え、人が支え合う心の源は、ここにあるように思われます。

活動
フォトグラフ



6月2日 ドッチボール大会補助



6月11日 勉強会

お知らせ

大学ホームページの教職課程サイトがリニューアル、JYSPのページができました！ http://www.kanagawa-u.ac.jp/teacher_training_course/jysp/

JYSP事務局

【場所】横浜キャンパス19号館217号室
【TEL】045-481-5661 (内: 4433)

【開室時間】10:00～18:00 (平日) * 土日祝は閉室
【E-MAIL】jysp-2010@kanagawa-u.ac.jp

KU
KANAGAWA UNIVERSITY

JYSP BULLETIN

第5号
2011.10.1
発行

横浜市長と JYSP メンバーが「ぬくもりトーク」



2011年7月19日(火) 横浜キャンパスにおいて、「ぬくもりトーク」が行われ、林文子横浜市長とJYSPメンバーらが『ボランティア活動を通しての学び』をテーマに意見交換を行いました。

市長からは、「ICT(情報通信技術)の時代で、人と人の関係が希薄になってしまった今、このように愛を持って常に人と触れ合っている方々がいらっしゃることがとてもうれしく、ありがたく思います。」とのお言葉をいただきました。

～「ぬくもりトーク」を終えて～

外国語学部3年 伊賀 林太郎さん



私は、学校ボランティアを通じて自己成長を実感することができています。

子どもたちとの関わりの中で、自分は将来教師になったら、どのように指導していくかという教師観を持てる大切な学びの場でもあります。「ぬくもりトーク」では、自分の活動から得た学びと教師への強い想いを発表させて頂きました。普段は人前に出て話すことは苦手ですが、多くの子どもたちと接してきたために殻を破ることができました。経験は何事も自分を大きく変えてくれます。

自分を高めるために、勇気を持って一歩前に踏み出していきたいです。

～「青少年の居場所」プロジェクトからの報告～

JYSPスタッフ 小畑 慎司



青少年の居場所プロジェクトで大学近くの中丸小学校体育館で行われるフットサルに週1回とある小学生と一緒に参加をしています。その小学生は、「JINDAIのびのび楽習塾」に通い始めた中国籍の男の子で、両親の帰宅が遅く、1人で留守番をすることが多かったため、フットサルへの参加を勧めました。今では、毎週金曜日に一緒に反町駅から中丸小学校へ行っています。

最初は言葉も少なく、バスでの移動中もただ黙って座っていて、また、フットサルでもゲームに参加することはあまりありませんでした。しかし、回数を重ねていくうちに、バスの行き帰りでは、積極的に話をするようになり、外の風景に興味を持ったり、乗り方や降り方を覚えようとする等、色々なことに興味・関心を示すようになりました。今ではフットサルで得点をすることもあります。

彼の通っている小学校や「JINDAIのびのび楽習塾」でも日に日に生き生きと活発になっているそうです。私は、JYSPの活動に参加した彼の大きな変化をみて、大きく成長をしていることを実感しています



詳細はこちらで
紹介しています

神奈川県 http://www.kanagawa-u.ac.jp/teacher_training_course/2011/07/20/003307/
横浜市市民局 http://www.city.yokohama.lg.jp/shimin/kochosodan/kocho/nukumori/23/0719.html

地域密着

7/1 (日) アメリカンフットボール部 Atoms in 神橋小学校



大学近隣の横浜市立神橋小学校に、関東1部リーグに所属する本学のアメリカンフットボール部Atomsが登場しました。

早朝からの厳しい暑さにも関わらず、激しいタックルや迫力のあるプレーに子どもたちは真剣な眼差し、後半には大きな選手を相手に「フラッグフットボール」を体験するなど、明るく楽しそうな子どもたちの様子を見ることができました。



8/1 (月)~3日(水) 神中ブロック「サマースクール」

神奈川中、白幡小、大口台小



大口台小学校では、「ウキウキカヤック教室」が開催されました。子どもたちは仲間とパディを組み、カヤックに乗ることから始め、最後にはレースで盛り上がりました。

仲間と助け合い、転覆したカヤックを起こしたり、夢中でパドルを操作する姿は、とても勇ましかったです。

8/27 (日) 第31回 片倉台団地夏まつり

人間科学部2年 長谷川文哉さん



週に1回、神大寺地区センターの「青少年の居場所」で中高生とバンド練習を行っています。

夏祭りのバンド披露は、アンコールも起るくらい盛り上がり、大成功でした。今までで一番の演奏ができた女子中学生たちの笑顔が、何よりも嬉しかったです。

8/24 (水)

デイキャンプ



のびのび楽習塾のこどもたち8人が参加しました。



お知らせ

☆ 「JINDAI のびのび楽習塾」 開講予定 (毎月第1・3土曜日 9:30~12:00、横浜キャンパス内)

2011年10月1日(土)、15日(土)	2012年1月7日(土)、21日(土)
11月5日(土)、19日(土)	2月4日(土)、18日(土)
12月3日(土)、17日(土)	3月3日(土)、17日(土)

* 予定が変更になる場合がありますので、詳細はJYSP事務局までお問い合わせ下さい。

☆ ドキュメンタリー映画『マジでガチなボランティア』上映会・講演会のお知らせ

2011年10月17日(月) 横浜キャンパス内 17:40上映 19:20講演 20:10終了

医学生が海外で行ったボランティア活動を迫ったドキュメンタリー映画を上映し、映画の主人公である石松宏章氏による講演を行います。 *** 観覧希望の方は、JYSP事務局までお問い合わせ下さい***

JYSP事務局

【場所】横浜キャンパス19号館217号室
【TEL】045-481-5661 (内:4433)

【開室時間】10:00 ~ 18:00 (平日) * 土日祝は閉室
【E-MAIL】jysp-2010@kanagawa-u.ac.jp

